

【根拠資料1-1】

2015(平成 27)年度 教育学部自己点検・評価報告書(教職キャリアセンターも含む)

1. 「学習成果の可視化」に向けた取り組み

(1) 現状の説明

教育学部では、2012年度にラーニング・アウトカムズを定め、2014年度から新カリキュラムをスタートさせた。その時点では「学部教育で育成すべき人材像を3ポリシーに基づいて描き、ラーニング・アウトカムズとカリキュラム・マップによって、その人材像に対するカリキュラムの正当性を裏付ける」という段階にはなかなか至らず、「各授業が掲げる到達目標の達成度を測る」ことはできても、「その集積によって学部教育の成果を測定する」という質保証の作業が十分に行えない状況にあった。

そこで昨年度、まずラーニング・アウトカムズに基づくカリキュラム・マップの作成を試みたが、その時点でのアウトカムズが教育学の学問的体系に基づいて作成されていたため、結果として各専門科目に当てはまるアウトカムズが、その授業内容からほぼ1つか2つに定まってしまうこと、また同一の分野に属する科目が、基本的にすべて同じ項目に対応してしまうことといった問題点が明らかとなった。

そのため、教育学や心理学の学問的な根拠を保ちつつも、それと同時に広くどの専門科目でも育成に寄与できるような、新たなラーニング・アウトカムズを再設定することが検討された。その議論の中で、日本学術会議で示されたような「知識・理解」「汎用的能力」「態度・構え」の区分にしたがってアウトカムズを設定する方が、社会に対して説得力を持つとの考えから、以下のような、新しいラーニング・アウトカムズを作成し、2015年3月23日の教授会で承認された。

創価大学教育学部 新ラーニング・アウトカムズ

知識・理解

1. 教育学と心理学に関する基本的な知識を理解する。
2. 教育学と心理学の研究方法を理解する。
3. 世界（経済、政治、倫理、宗教、自然、芸術、身体、そしてこころ）の諸問題を理解し、そこに教育問題・課題を捉えることができる。

考える力

4. 世界と自己自身の間を結びつける意味で、反省的に思考することができる。
5. 世界の諸問題を教育的または心理学的な観点から分析的に思考することができる。
6. 世界の諸問題の解決を教育実践または臨床実践としてデザインする意味で、構想的に思考することができる。

行為する力

7. 教育学と心理学の研究方法を対象と目的に応じて適切に利用できる。
8. 世界の諸問題に対する教育実践上あるいは臨床実践上の解決を見出し、それに取り組むことができる。

9. 教育実践または臨床実践に、同僚性のなかでリーダーシップを発揮しながら取り組むことができる。

態度

10. 自他とのコミュニケーションを通して、絶えることない自己成長を追求する態度を持つ。
 11. 価値に対する謙虚さを自覚しなければならない意味で、教育学的な倫理性を持つ。
 12. 他者の主体性を尊重しながら、その成長を支え促そうとする教育学的な責任感を持つ。

このラーニング・アウトカムズにしたがって、今年度はカリキュラムマップ作りを行った。その結果の一部を以下に掲げる。

教育学科												
授業科目/ラーニングアウトカムズ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
基礎演習Ⅰ			○	○					○	◎		
基礎演習Ⅱ			○	○					◎	○		
教育学概論Ⅰ	◎			○				○				○
教育学概論Ⅱ	◎			○				○				○
学校研究	○				◎		○			○		
教育学研究法		◎			○		○				○	
教育哲学												
教育社会学	◎		○		○						○	
教育方法学	○				◎			○				○
学習理論		○			◎			○		○		
教育史A	◎		○	○	○							
教育史B	◎				○			○			○	
カリキュラム論	○					○		◎	○			
教育行財政学	◎		○								○	
教育評価	○				○			◎		○		
教育学特講A(海外招聘教員)												
教育学特講B												
教育学特講C												
心理学概論Ⅰ	◎	○			○		○					
心理学概論Ⅱ	◎	○			○							○
教育心理学Ⅰ	◎				○		○					○
教育心理学Ⅱ	◎				○		○					○
発達心理学Ⅰ	◎				○			○		○		
発達心理学Ⅱ	◎				○			○		○		
臨床心理学Ⅰ		○	○		○		◎					

臨床心理学Ⅱ		○	○		○		◎					
教育カウンセリング			○		○			◎				○
心理学特講 A (海外招聘教員)												
心理学特講 B	◎	○			○						○	
心理学特講 C	◎	○			○		○					
国際開発教育論	◎				○	○		○				
海外から見た日本の教育			◎		○			○				○
比較・国際教育学 A			○			◎		○		○		
比較・国際教育学 B			◎		○			○				○
海外教育事情 A												
海外教育事情 B												
海外教育研修			◎		○			○				○
英語特講 A			○		○	◎		○				
英語特講 B			○		○	◎		○				
英語特講 C												
Educational Psychology	◎	○			○						○	
Sociology of Education	○				○	○		◎				
国際教育特論 A (海外招聘教員)												
国際教育特論 B (海外招聘教員)												
教職概論			○			◎			○			○
教育とボランティア I	○			◎			○					○
教育とボランティア IIA			○		◎			○				○
教育とボランティア IIB		○				◎			○			○
生徒・進路指導論	○					○						
特別活動：教育	◎					○		○				
教育とキャリア								○		○		○
学校インターンシップ I			○		○			○		○		
学校インターンシップ II			○			○			○		○	
学校インターンシップ III			○			○			○			○

各専門科目について、担当教員にお願いして最もよく当てはまる項目に◎、それ以外に当てはまる項目について最大 3 つまで○をつけてもらったところ、項目間のばらつきは見られるものの、おおむねバランスよく各項目に◎や○が当てはまる様子が見られた。上の例は教育学科の科目の一部であるが、最後の 2 項目を除き、すべての項目に◎がひとつ以上入っていることがわかる。

ところが同じ作業を児童教育学科の専門科目について行ってみたところ、教育学科ほどはうまく行かないことがわかった。それは、例えば教科教育科目において、「算数科教育」や「国語科教育」と教科が変わっても、上記のような項目区分ではどれも目標が似通ってしまうということである。また、児童教育学科では同じ学問領域の教科内容科目として、たとえば美術に関しては「美術の基本」「立体表現基礎」

「平面表現基礎」「表現と鑑賞」といった科目を配置しているが、これらについても項目の配当はほぼ同じになってしまう。このような結果から、児童教育学科については科目の特性をよく表すような、別のラーニング・アウトカムズを検討しなければならないかもしれない。

しかしながら、多少の不都合はありながらも、このように各専門科目とラーニング・アウトカムズの対応が「目に見える」形になったので、いよいよ来年度は実際の教育成果をマップによって評価するプロセスへと進んでいきたい。

(2) 点検・評価

1) 効果が上がっている事項

シラバスの到達目標について、「目標がおおむね達成されればB評価に相当する」という達成評価基準がだいたい浸透してきた。

3年前から行っている「学生生活調査」が蓄積され、項目間の関連が見られるようになってきた。

2) 改善すべき事項

カリキュラム・マップに基づく3ポリシーが描く人材像の達成度評価がまだなされていないため、学部教育の成果が可視化される段階に至っていない。

(3) 将来に向けた方策

1) 効果が上がっている事項

生生活調査と各授業における到達度の測定を組み合わせることで、学業面と生活面の両方向から学生指導に当たれるようにしていきたい。

2) 改善すべき事項

早急にかリキュラム・マップに基づいてカリキュラムの分析を行い、学部が提供しているカリキュラムについてその教育効果を可視化させていきたい。

(4) 根拠資料

1-1 : 2012年度教育学部ラーニングアウトカムズ(2012. 2. 29)

1-2 : 2014最終報告(教育学部)(2015. 2. 28)

1-3 : カリキュラムマップ_教育学部(2016. 1. 20)